



Title	Voices of Nowhere:Mobility, Memory, and Theory in Contemporary American Migrant Fiction
Author(s)	桑原, 拓也
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/96022
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ 桑 原 拓 也 ）	
論文題名	Voices of Nowhere: Mobility, Memory, and Theory in Contemporary American Migrant Fiction (どこでもない場所からの声 ——現代アメリカ移民文学における移動可能性、記憶、理論)
論文内容の要旨 本論文は、現代アメリカ移民文学を移動可能性・文学理論・記憶の観点から分析したものである。近年、批評理論を高等教育機関で学び、自らの作品に理論を活用するアメリカ作家が増加している。こうした流れは移民作家にも波及しているが、その一方で、現代移民作家に関する研究の多くは彼らの移民経験や母国との関係性に焦点を当ててきたため、作品の理論的な発展や形式についての言及が不足する傾向にある。こうした研究に対し、本論文は、現代アメリカ移民文学における批評理論的・形式的な発展を分析することで、彼らの作品が自身の移民経験および現代のアメリカを、より効果的に表現していることを示す。本論文では、現代アメリカ移民文学における理論的・形式的な発展が特定の地域あるいは言語に偏重していないことを示すため、ルーツや母語が異なる5名の作家を論じている。ユーゴスラビア（ボスニア）出身のアレクサンダル・ヘモンによる<i>The Lazarus Project</i> (2008)、トルコとアイルランドにルーツをもつジョセフ・オニールによる<i>Netherland</i> (2008)、ナイジェリア系アメリカ人作家テジュ・コールによる<i>Open City</i> (2011)、メキシコ出身のヴァレリア・ルイゼリによる<i>Lost Children Archive</i> (2020)、ベトナム系アメリカ人作家オーシャン・ヴォンによる<i>On Earth We're Briefly Gorgeous</i> (2019)を扱う（作家の並びは本論文の章構成に基づいている）。 第1章の序論では、パキスタン系イギリス人作家モーシン・ハミッドによる小説<i>The Reluctant Fundamentalist</i> (2007)における世界文学的な要素を出発点に、本論文がハミッドの作品と同じ視点を持つ上記5名の作家たちを扱うことを示す。現代アメリカ移民作家を分析したカレン・アールとソニア・ウェイナーの研究を参照することで、5名の作家たちにおける自伝的・脱国家的な特徴を示す。そのうえで、本論文における読解の手法としてポール・ド・マンを参照することで、現代アメリカ移民作家に対する研究の多くが、彼らの移民経験や歴史と作品を結びつけていることを批判し、彼らの作品に特徴的な理論と形式の発展を中心に読解することを確認する。 第2章では、本論文で扱う5名の作家たちが共有する近年の文芸批評の潮流を分析する。具体的に、「アイロニーの衰退と「理論世代」の誕生」、「文学作品における隠喩的な深層」、「オートフィクション」、「惑星性」という4点のキーワードを分析する。まず、アイロニー文化はポストモダニズムにおいて最も重要かつ発達を遂げた様式であったが、現代において、アイロニーの支配的な影響力は弱まり、代わりに誠実さが再興しつつあることを論じる。さらに、アイロニー文化と距離を置く作家たちが批評理論を文学作品に織り交ぜる「理論世代」の作家たちであることを示す。次に、建築や映画、文学における深層の消失、すなわち歴史の消失がポストモダニズムを定義するひとつの要素であったが、現代では表層でもなく、深層でもない中間に位置する態度を作家たちがとっていることを示す。第三に、近年の移民作家たちの多くが、オートフィクションと呼ばれる自伝的な要素を織り込んだフィクションを執筆する傾向にある。オートフィクションはしばしば自伝から発展したと考えられるが、その一方でポストモダン文学におけるメタフィクションとの共通点が多いため、本論文ではオートフィクションはメタフィクションの形式を発展させたものであると仮定する。さらに、読者に作品の創作過程を提示するような形式をもつオートフィクションを、「プロセス・ライティング・フィクション」と名づける。最後に、ガヤトリ・スピヴァクの惑星性の概念を参照し、現代アメリカ移民作家たちが脱国家的な特徴を有し、芸術的な自律性を維持していることを示す。 第3章では、アレクサンダル・ヘモンによる小説<i>The Lazarus Project</i>を取り上げる。本作品は、1908年のシカゴで警察署長の暗殺容疑をかけられ、銃殺されたユダヤ系移民ラザラス・アヴァーバックを題材にしている。本作品では、作者ヘモンに類似したボスニア出身の一人称の語り手ブリックがラザラスの足跡を辿り、シカゴから東欧へ向かう2008年の物語と、ラザラスの姉オルガが彼の死の真相を探る1908年の物語が交互に展開される。本論文では、アメリカとボスニアのどちらにも所属できないブリックが、自身と似た境遇のラザラスに共感することで、彼の国家に対する帰属意識が「どこでもない (nowhere)」にあることを見出す。本論文において、帰属意識が「どこでもない」ことは国家に居場所がないことを示すのではなく、むしろ国家間の広大な空間を移動可能な主体であることを論じる。そのうえで、本作品がラザラスの死を道徳的・倫理的なモチーフとして提示せず、決定不可能な状態にしておくことこそがへ	

モンの試みであることを示す。

第4章では、ジョセフ・オニールによる小説*Netherland*を取り上げ、語り手ハンスに脱国家的な特徴を見出すことを目的とする。本作品では、同時多発テロ直後のニューヨークとロンドンを舞台に、オランダ出身のハンスが家族との離別と再会を通し、母と母国の記憶を物語る。また、ハンスはトリニダード・トバゴ出身のチャックと出会うことで、アメリカン・ドリーム of 挫折を間近で目撃する。このアメリカン・ドリーム of 挫折を通し、ハンスはアメリカにもオランダにも所属せず、「どこでもない」空間を見出す。本論文では、「どこでもない」の感覚を持った現代アメリカ移民文学作品を「どこでもない小説 (Novels of Nowhere)」として定義する。

第5章では、テジュ・コールによる小説*Open City*における文芸批評家ポール・ド・マンの影響を分析する。「理論世代」の一人であるコールによって書かれた本作品は、ナイジェリア出身の語り手ジュリアスがニューヨークとブリュッセルを遊歩し、芸術・歴史・哲学について語る形式を持つ。ここで言及される哲学者や批評家は多数存在するが、本論文は特にド・マンが本作品の物語から形式にまで関わっていることを明らかにする。本論文では、ド・マンの主著のひとつである『盲目と洞察』を参照し、批評家は最高の洞察を得た瞬間に盲目になるという彼の議論を踏まえ、ジュリアスの二面性について考察する。一見すると、ジュリアスは豊かな知識と教養をもって街についての分析を行うため、知的で信頼できる語り手のように思える。しかし、作品の終盤で、ナイジェリアで過ごした青年期にジュリアスが知人の女性に対し、性的な暴行を働いていたことが明かされ、彼は不誠実で信頼できない語り手になる。本論文では、この出来事が明かされる以前から彼の二面性が徴候的に観察されることを示し、この二面性の発露にド・マンの主張が関与していることを論じる。

第6章では、ヴァレリア・ルイゼリによる小説*Lost Children Archive*を取り上げ、非難民作家が難民をフィクションで扱うことの困難を論じる。ルイゼリは、米墨国境を超えてアメリカに不法入国する子どもたちの通訳を務めた経験をノンフィクションにまとめている。さらに、その2年後、ルイゼリはその経験をもとに、難民の子どもたちについてのフィクション*Lost Children Archive*を執筆している。特筆すべきは、多くの難民小説が難民を語り手や主人公に据えるのに対し、本作品では匿名の家族（語り手の女性、語り手の夫、もう一人の語り手の少年、少女）が語り手の中心になることである。この試みによって、ルイゼリはフィクションでありながら、難民の小説ではなく、難民を語ることの困難について書くことが可能になる。そして、本論文はリチャード・ローティの「リベラル・アイロニスト」の概念を援用し、ルイゼリが非難民であることを自覚しながらも、想像力と経験を調和させたうえで、難民を表す表現を模索していることを明らかにする。

第7章では、ベトナム系アメリカ作家にとってのベトナム戦争およびベトナムの共同体との関わりについて考察し、その例としてオーシャン・ヴォンのオートフィクション*On Earth We're Briefly Gorgeous*を扱う。まず、アジア系アメリカ研究者スッチェン・チャンによる「ベトナム系アメリカ1.5世代」をキーワードに、現代ベトナム系アメリカ作家のベトナムに対するアプローチを分析する。「ベトナム系アメリカ1.5世代」とは、アジア的な価値観と規範だけでなく、親世代の言語（ベトナム語）を話すことができるベトナム系アメリカ作家を指す。しかし、2021年に初の小説を出版した2世作家エリック・ウェンは、1.5世代と異なり、ベトナム戦争やベトナム的価値基準と彼自身を切り離している。本論文で取り上げるヴォンは、1.5世代に属するが、1.5世代の作品を踏まえながらも、2世の価値基準を作品に反映している。ヴォンの作品において、語り手リトル・ドッグはベトナム戦争との関係性によって自らを定義するのではなく、「書く行為」を通して自らを定義する。本論文は、リトル・ドッグの「書く行為」に対する強烈な自意識がポストモダン的な実験性を引き継ぎ、メタフィクションの発展的な形式である「プロセス・ライティング・フィクション」で書かれていることを明らかにする。そのうえで、ヴォンがベトナム的な伝統を踏襲しつつも、アメリカのポストモダン作家たちが行ってきた実験性を引き継ぐ作家でもあることを論じる。

第8章の結論では、本論文で扱ってきた5名の作家たちが、既存の国民国家とグローバル化する世界の間で「どこでもない」空間を描いていることを確認する。そのうえで、現代アメリカ移民文学におけるW・G・ゼーバルトと記憶の関係性について考察する。最後に、本論文で扱ってきた5名の作家たちは国民国家の主権とそれに対する抵抗を書きながらも、経済的・政治的なアメリカの影響力の内部に存在するため、アメリカの制度化されたシステムの一部になっていることを示す。しかし、彼らがアメリカの内部に存在することで、様々な差別や不平等、分断を常に内包するアメリカの姿を書きうると結論する。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (桑 原 拓 也)			
論文審査担当者	(職)		氏 名
	主 査	教授	木原 善彦
	副 査	准教授	霜鳥 慶邦
	副 査	教授	里内 克巳

論文審査の結果の要旨

本論文は現代、特に21世紀に入ってからアメリカ移民文学を移動可能性・文学理論・記憶の観点から分析したものである。近年のアメリカでは、大学の創作科などで批評理論等を学び、自らの作品に理論を活用するアメリカ作家が増加しており、移民作家もその例外ではない。この論文は現代アメリカ移民文学における批評理論的・形式的な発展を分析し、彼らの作品が現代のアメリカを効果的に表現していることを明らかにしている。桑原氏はここで、ルーツや母語が異なる5名の作家を論じている。より具体的にはユーゴスラビア（ボスニア）出身のアレクサンダル・ヘモンによる *The Lazarus Project* (2008)、トルコとアイルランドにルーツをもつジョセフ・オニールによる *Netherland* (2008)、ナイジェリア系アメリカ人作家テジュ・コールによる *Open City* (2011)、メキシコ出身のヴァレリア・ルイゼリによる *Lost Children Archive* (2020)、ベトナム系アメリカ人作家オーシャン・ヴオンによる *On Earth We're Briefly Gorgeous* (2019) の5作が取り上げられているが、論文はこれらの作品を論じる中で、他にも多くの移民作家の作品に論及しており、大きなテーマを取り上げるにふさわしい目配りのよさという点でも高く評価できる。

第1章の序論では、パキスタン系イギリス人作家モーシン・ハミッドによる小説 *The Reluctant Fundamentalist* (2007) における世界文学的な要素を出発点に、現代アメリカ移民作家を分析したカレン・アールとソニア・ウェイナーの研究を参照しつつ、5名の作家たちにおける自伝的・脱国家的な特徴を示した上で、現代アメリカ移民作家に対する研究の多くが彼らの移民経験や歴史と作品を結びつけていることを批判し、ここでは彼らの作品に特徴的な理論と形式の発展を中心に読解することを確認している。

第2章では、本論文で扱う5名の作家たちが共有する近年の文芸批評の潮流が分析されている。用いられているのは、「アイロニーの衰退と“理論世代”の誕生」「文学作品における隠喩的な深層」「オートフィクション」「惑星性」という4つのキーワードである。要点としては、①現代においてアイロニーの支配的な影響力は弱まり、代わりに「理論世代」において誠実さが再興しつつあること、②文学におけるポストモダニズムを特徴づける重要な要素の一つは深層（歴史）の消失であったが、現代では表層でも深層でもない中間に位置する態度を作家たちがとっていること、③近年の移民作家の多くはオートフィクション的な書き方を採用しているが、その源流は（伝統的な）自伝というよりも、ポストモダン小説に見られたメタフィクションからの派生物と考えられること、④アメリカ移民作家たちの作品にはガヤトリ・スピヴァクが“惑星性”と呼んでいるような脱国家的な特徴を有していることが指摘されている。

第3章はアレクサンダル・ヘモンの小説 *The Lazarus Project* を取り上げ、アメリカとボスニアのどちらにも所属できない主人公が自身と似た境遇を持つ百年前のユダヤ系移民（ラザラス）に共感するところから、「どこでもない場所(nowhere)」に対する帰属意識を持っていることに焦点を当てる。これは「移民は特定の国民国家に居場所を持たない」という消極的・否定的な意味ではない。そこで明らかになるのはむしろ、国家間の広大な空間を移動可能な主体であるということだ。しかし同時に、ラザラスの死が道徳的・倫理的な意味で決定不可能なまま宙吊りになっていることの重要性も指摘されている。

第4章は現代版の『グレート・ギャツビー』とも絶賛されたジョセフ・オニールによる小説 *Netherland* を取り上げ、作中に見られる脱国家的な特徴、惑星性の表れを丁寧に論じ、この作品に代表されるような、「どこでもない場所(nowhere)」の感覚を持った現代アメリカ移民文学作品を「どこでもない場所の小説 (Novels of Nowhere)」と定義している。

第5章は文芸批評家ポール・ド・マンの主著『盲目と洞察』を参照しながら、テジュ・コールの小説 *Open City* を論じる。批評家は最高の洞察を得た瞬間に盲目になるというド・マンの議論を踏まえつつ、この小説の終盤で明らかにされる主人公ジュリアスの二面性が実は作品のあちこちで徴候的に観察されることを桑原氏は的確に示し、興味深い解釈を提示している。

第6章はヴァレリア・ルイゼリ的小説 *Lost Children Archive* を取り上げ、非・難民作家が難民をフィクションで扱うことの困難を論じている。多くの難民小説が難民を語り手や主人公に据えるのに対して、この作品では匿名の家族が語りの中心になっているが、これこそが非・難民であるルイゼリが想像力と経験を調和させながら難民を表象する表現を模索した結果だと、桑原氏は指摘する。

第7章はベトナム系アメリカ作家とベトナム戦争との関わりについて考察しながら、オーシャン・ヴオンのオートフィクション *On Earth We're Briefly Gorgeous* を扱う。主人公リトル・ドッグの「書く行為」に対する強烈な自意識がポストモダン的な実験性を引き継いだ結果、作品がメタフィクションの発展的な形式としてのオートフィクションとなっている、と桑原氏は論じ、このタイプのオートフィクションを「プロセス・ライティング・フィクション」と命名する。

第8章の結論では、本論文で扱ってきた5名の作家たちが、既存の国民国家とグローバル化する世界との間で「どこでもない場所」を描いていることを振り返った上で、現代アメリカ移民文学におけるW・G・ゼーバルトの影響についても考察する。最後に、この論文で扱ってきた5名の作家たちは経済的・政治的なアメリカの制度化されたシステムの一部になっているにもかかわらず、彼らにはそこに胚胎されている「どこでもない場所」が見えているので、アメリカという国が内包する様々な差別や不平等、分断を書きうるのだと結論している。

全体に本論文は多くの先行研究を踏まえつつ、そこから得られる洞察を大きな視野の中で丁寧に組み合わせることで現代アメリカ移民作家たちの作品に見られる重要な特徴を的確かつ見事にとらえており、高く評価できる。加えて、それらの特徴を一種の20世紀後半のポストモダン小説の発展形と見なす視点には説得力もあり、独創性も高い。ここで扱われている世代以前の移民文学や、移民ではない現代の作家たちとの比較があれば議論がさらに深められることも考えられるが、それは非常に時間と労力を要する研究となるので、今後の課題とすべきだろう。

以上により、本論文を博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。